

運動会と子どもたちの生活

清水エミ子



一 子どもと運動会

夏休みが終って二学期がはじまる時、保育者は二学期のスタートが楽しくスベリ出せるように、主な行事や活動を話しあい、喜びときたいをもたせます。そのひとつに運動会があります。

「もうすぐ運動会よ」と子どもたちに話しかけただけで、子どもたちはワイイとかんせいをあげてとびあがります。

子どものかんせいを聞いて、保育者は、子どもたちすべてが運動会を喜び楽しみにしていると受けとってしまいやすいのです。そして練習に練習をかきねなくてはできないような高度の運動会を計画してしまいがちなのではないのでしょうか。ワイイというこのかん声を、どううけとめて展開したらよいのでしょうか。こんなところから私たちは反省してみる必要があるようです。

す。運動会の活動の途中、

● 「もう運動会止めにしてお部屋で絵がかきたいな」

● 「パン食い競争しない運動会なんかつまんなくてやだな」

● 「もうくたびれて、やんなっちゃったな」

● 「ぼくいくら一生懸命かけたしても負けちゃうから運動会やりたくないなあ」

● 「せっかくおもしろい物作っているのに、お庭に集合とか、ホールに集合っていうから、ぼく運動会はきらいじゃないけどやだなと思うよ」

こんなことばを子どもたちから聞いてしまうと「運動会だワイイ」とかん声をあげたワイイのいみは、ただ何かおもしろいことがあるらしいという、群集心理のかん声のようです。

こんなことばを運動会の活動を進めていくうちに一度も聞く

ことなく、

「今日も昨日の続きの運動会の練習しようね」

「今日はこんな準備しなくちゃ」

「オーイ、昨日、君バトンわたす時、三回とも落していたから練習しておきなさい。おしえてあげるから」

「今日はどこのチームがかったかな、今日は〇〇組かもしれないね」

というような楽しみのことば、子どもたちが、自分たちで運動会を盛りあげようとするこぼがきかれ「さあ運動会の練習よ」といっただけで、ワイーと全体の生き生きしたかん声があがらなくては、運動会の意味は達成されておらず、子どもたちの生活にプラスされた経験とはいえないと思うのです。

二 運動会は子どもの生活に必要なか

なぜ運動会を、どこの幼稚園、保育園でもするのでしょう。

計画や準備を考えただけでも大変手のかかるめんどろな活動です。何か他の活動（行事）でおきなうことはできないのでしょうか。また毎日の保育の中では、達成することができないのでしょうか。

① 従来の運動会の反省

年中行事のひとつとしてあつかってしまい計画立案に対して

子どもたちの参加が少なく（全くないところも多い）、保育者が計画し、子どもたちにあたえ、練習させてできあがらせてしまう。（運動会をどうしてどのようなものにしようかと、時間をかけて、はじめから子どもたちを参加させず「さあ競争の次は、玉入れ」と保育者があたえてしまう）

● 毎日の生活が運動会で終始してしまい、経験や活動にかたよりができ、子どもたちは無気力にいわれたことをいわれた通りに、ただやるだけになってしまう。

● 保育者が活動をひっぱってやらせてしまい、子どもたちのものにならず疲労ばかりしてしまう。

● 高度なようきゅうをしてしまい能力のない子どもたちは劣等感をもってしまう。

● ひとつひとつの活動と活動のつながりがなく、こま切れるので、子どもたちが、まとまりのある活動の展開として理解することができず、日常の保育から分離してしまふ。

② 毎日の保育とのちがい（日常ではおきなえないもの）

● 学級単位や、年齢単位の活動でなく幼稚園全体としての活動が展開できる。

● 毎日の活動では展開しにくい運動機能を十分つかった活動ができる。

● ひとつの目標に向って、園全体での役割、分担をして、協同

活動が展開できる。

●親と子どもとで、ひとつの活動を展開することができる。

以上のようなちがいが、考えられるので、二学期の上旬のうちには、どこの幼稚園、保育園でも運動会の活動を展開するのではないでしようか。それなら、私たちは、この毎年めぐってくる運動会を義務的に展開するのではなく、何をどのようにふまえ、ねらって、どのような効果をあげなくてはならないかということとを、目の前の子どもたちをしっかりと見つめて、正しい運動会の活動を指導展開しなくてはならないでしょう。

三 運動会は子どもの生活にとって、どういう意味が

あるのか

具体的な活動を通して考えてみたいと思うのです。

①運動会の活動では何をねらうか。

(1)単元活動の展開としての運動会ができること。

●ひとつひとつバラバラのものをつなぎあわせるのではなく、

ひとつの主題でまとまっている(構成)活動であること。

●レクリエーションやショーではないのでひとつひとつの活動のできあがりを考えるのではなく、その過程を大切にしてつみあげる。

(2)広い場所で運動機能を十分つかった活動ができること。

●日常の活動(学習)の中で体得した運動能力運動機能をつかった運動で十分發揮して楽しい遊びが展開できる。

●全身をのびのびうごかしてリズム表現したり競技をしたりする。

(3)本当の意味の協力のありかたを知って活動できる。

●ルールを正しく守り楽しく力をあわせ、はげましくって活動する。

●役割を責任をもってはたし、総合的な活動や計画が達成される。

●規律ある行動をとる(団体行動)ことになれ正しく活動する。

●ゲームやリズム遊びを創意を出しあって作って活動する。

(4)思いきり自分の力をためす活動ができる。

●力いっぱいおびのび行動する。

●きびんな行動がとれるようにする。

●命令通り行動することができる。

●リズムに合わせて身体表現を楽しむことができる。

●運動能力を身につけることができる。

以上のようなねらいを運動会の活動でねらうことができるのではないかと思われるのです。それではこのねらいを達成するのに、教育的な立場で考えたら、どのように活動を展開してい

つたらよいでしょう。

②活動を展開するための保育者の心がまえ

(1)運動会全体がひとつの主題でまとまったものであるように計画を立案する。

●運動会を自分たちで進めていこうという意欲がもりあがるような環境の設定に心がける。

●日常の経験の積み重ねとしての活動であること。

●平素の保育を乱さないようなプログラムや、内容であるように気をつける。

(2)全員が興味をもって参加できるものを計画する。

●何回も練習しなくてはできないような高度な活動や経験はさけるようにする。(ルールのふくぎつなものはさける)

●能力差がはつきり表われてしまい個人的に劣等感を抱いてしまったり興味をうしなってしまうようなものはさけ、個々の能力が適当に發揮できるものをとりあげる。

●年齢によって出場回数や疲労度を考えたプログラムにする。

(3)安全で事故なく楽しんで活動できるようにする。

●ツ反陽転の子どもや、虚弱体質の子どもなどの活動の参加を考慮する。

●手足のつめをきちんと切っておいたり、あつぎをしないよ

うにさせる。

●用具、教具、遊具、施設などの修理、補修を完全におこなってあるものをつかう。

以上のような心がまえで、ねらいが達成されたなら、子どもたちひとりひとりが、個人としても集団の一員としても成長することができると思われるし、日常保育では達成することのできないかかずの経験を体得することができると思われる。このように子どもたちの生活にとって非常に多くの意味があると考えられるのです。

③運動会の展開事例

次に以上のことがらをまとめて、ひとつの事例として考えてみましょう。

まず最近では、どの園でも運動会の時期が早くなってきて、二期期がはじまってすぐ九月のうちにしてしまうところ、おそくとも十月上旬には終ってしまうようです。(へ地方ではちがうでしょうが)そこで夏休みの経験を運動会にとり入れて考えてみるのもよいでしょう。

主題は「海に行ったよ」または「海の運動会」

海のない山国では、水遊び、山の運動会など、その環境によって主題が設定できるでしょう。今ここでは、海の運動会で展開してみることにします。

主題、海の運動会

【導入】 海の経験を話しあい、思い出しあう。

●海の動物たちは今何をしているだろうと話しあい、海の動物たちは子どもたちがいなくなったのでさみしくて、みんなでかけっこしたり、フォークダンスをしたりして毎日遊んでいるというようなお話を与えてみます。そして、

イ、魚の競争は、およぎ競争

ロ、カニの競争は、横歩き競争

ハ、貝の競争は、ずるずるすべり競争

ニ、ヤドカリは、お家はこび競争

ホ、たこは、すいついてひっぱり競争、それからたこおどりもあるんじゃないのなどと発言をうながしてみます。ここまで子どもたちがのってきたらもうしめたもので導入は成功です。

【展開】

次にひとつひとつ確かめていきながら子どもたちの創意をひきだしましょう。

イの魚の競争は、およいで競争、この時は保育室の環境構成もかね、いろいろの魚を作っておめんにして競争します。パトンはおめん下次の人におめんをかぶせることです。(しかしこの競技のおめんは後でお父さんたちの魚つりレースにあげる)

ロ、カニの競争、横歩きで競争します。手でハサミを作って

横歩き競争、団体競技に仕上げてみます。この時、年長はしゃがんで横歩き、年少は立って横歩といったように年長年少合同の競技にしてもよいのです。

ハ、貝の競争は、貝ひろいに作りかえさせ、砂の中に子どもたちが手ごろの石にマジックで着色した貝をうめ、きめられた数だけほりあて。入れ物に入れ帰ってくる競争などにしてもよいでしょう。また玉入れの玉に見たて、母親に赤白の玉を作ってもらった時、貝の形に作ってもらってもよいでしょう。

ニ、ヤドカリは、お家はこび競争、貝がらを作り、それをふたりに台の上のせ、おとさないようにはこぶのです。(子どもたちも背中に貝をしょって)

ホ、たこはつな引き、みんなねじりはちまきをしてつなひきです。

また、たこおどりは、おもしろいリズム遊びに仕組んでもよいでしょう。

このように素材はいくらでもころがっています。

へ、波はリズム遊びにし、大波小波で親子のおどりを作ってはどうでしょう。

ト、リレーなども、魚グループ、貝グループ、たこグループなどに分けてやってもおもしろいでしょう。

チ、おもしろく競争も、魚つりのしたくで、きおと、びくと、

長くつ、作った魚というようにきめてします。

り、また障害物競争も海底のぼうけんのよう仕組んでみましょう。

とびこみ台から、波のり、海の草をかきわけ進むなど、これは司会をつなぎのことばでどのようにもいきてきます。

親の競技にたこつばをつかったものをやってもよいでしょう。

準備体操は、さあこれから大きな海に入ります。そして今日は運動会をしますから、元気に体操して入りましょうね。と体操してからはじめましょう。

また、最後に園庭全体を海にして、親も子もいっしょにリズムカル表現あそびをしてフィナーレにしましょう。園庭のほうから、いろいろのものに分れた(魚、たこ、イカ、カニ)などの小グループが、音楽に合わせて表現をします。そして全員でひとつの型を作ってみるのです。海という文字でもよし、波形にくずれてもよし、園庭いっばいにリズムカルに動きましよう。

以上は、ほんの一例ですが、この海がくどくならないように、上品にさらりと仕上げることがこつです。また海か、また魚かということのないプログラム作りをすることが大切です。

必要なものの作成

入退場門

●大きな船とくじらの塩ふきの入退場門などどうでしょう。

●プログラムのデザインは、子どもたちに楽しい海の経験画を描かせてみてはどうでしょう。

このようにしてあつかうと、夏の経験の再現がらくに楽しくできるでしょう。また練習練習でやる必要がなくひとつひとつみんなで作ってはやってみるので、たいくつしないで作れるでしょう。

領域の総合が自然のうちにできる。(波の歌を作って唱い、表現を考えてやってみる)

●魚の絵をカンムリに作りかぶって競争する。このゲームとゲームのつなぎを、司会者が上手につなぎ、ひとつの物語のようにつなごう。 (魚がおよいでいると、タコが、私もおよいでたいなあーとうらやましがりました。すると、あなたはよくすいつく、すいつきいぼがあつていいじゃない、私たちが魚はないのよと、はなしました。タコはそれをきいてとくいになりました。そしてつなぎがはじまるといふように)そして運動会が終わったあと、共同画、絵話、紙しばいなどに発展させて活動を締めくくってはどうかでしょう。

次にひとつの具体的な活動から

④ひとつの経験の段階

リレー競技を展開するときのその段階と子どもの様子をはじめからみつめてみましょう。

●ただかかげればいい（先生にいわれた通り）という理解だけで（正しく理解していない）自分の番がくるとかかけてかえってくるだけのプレーで終わってしまう。

●競争であることがわかり、夢中でかかげだしてくるが、ルールをまちがえてしまう。

（他のグループの目標をまわってしまったり、バトンタッチせず、あわてて次がかげ出してしまおう）。

●自分と、自分のかけだす時にいっしょにかけられる相手との関係だけの競争と理解し、その仲間とだけで勝負のはんだんをしってしまう。

●グループ全体で勝たなくてはいいことがわかる。

●どうすれば早くできるか皆ではげましあうようになり次の走者をスタートラインに立っているように教えてあげたりするようになる。

●進んでスタートラインに立ってまてるようになる。

●自分の仲よしが他のグループにいて走るのをみると、他のグループを応援してしまい、自分のグループとの関係がぼや

けてしまうこともまだみられる。

●上手にできない友だちに、いろいろおしえたり、はげましたりしてグループでのチームワークが生まれてくる。

●ルール違反をしたものがわかり、見のがさず注意しあえるようになる。

●アンカーの走り方や位置などによってどこが勝っているかなども考えられるようになり応援の仕方もわかってくる。

このように個人の参加からルールを理解するようになり、ルールを守って正しくやることによって、社会的連帯感、責任感を育てることができるようになる。

以上のように、子どもの生活と運動会を考えた時、いろいろなことが達成できるよい活動であることがわかります。

要は、この活動で何をねらうのか、というねらいをしっかり把握して活動を進めて行くことです。そしてショーのような高度のものにまでひっぱり上げることなく、子どもが自分のものでひとつひとつの自分のものにしていけるものをまとめてプログラムに構成することではないでしょうか。

●ふだんできない運動機能の訓練と充実。

●ひとつの活動を自分たちでまとめ実行するという、まとまりのある体験と成功感を身につけさせたいものです。